



小山悦子、ステップスギャラリー5度目の個展である。小山は一貫して「絵画」を描き続けている。それが抽象性を強く帯びている為に、ロシア構成主義、アメリカ抽象表現主義、フランスアンフォルメル、具体美術協会、自由美術家協会などと比較考察される場合があるが、小山の作品はどこにも属さない。それどころか、小山は本当に抽象を描いているのかといった根本的な問題にも触れていかなければならない。今回、小山が展示した作品群の自在な色彩が見事としか言いようがない。赤、青、黄、白、黒といった、基本的な色彩の作品群を見ていると、そこから私は風景が浮かんでくる。それは具体的にどこであるという風景ではなく、時間をも超えた心の中にある情景であるのだ。

一番大きな写真は赤い作品の部分であるが、これを見れば分かるように、赤い作品に見えても、青の上に赤が、赤の上に白が乗せられているのだ。絵画のテクニクとしては当たり前ではないかと思うかも知れないが、小山の場合、この様々な色が同じ画面の中で共存していることに大きな意味が浮き上がってくる。小山は、世の中には善だけではなく悪が満ちていることを、宗教を通じて知っている。その善さをも、常に悪と紙一重の存在であり、何時かその価値観が逆転するかも知れないことも前提に絵画を制作している。真の平和とは何か。真の人間の生きる姿とは何か。我々は何故共存しなければならないのか。永遠に解けないこの問題を、小山は祈りによって考えている。

